

37

原発性肺癌におけるCEA値の検討

長崎大学第2内科

○植田保子 今村由紀夫 雨森博政
籠手田恒敏 奥野一裕 原耕平

目的：1965年Goldらによって初めて発見されたCEA (carcinoembryonic antigen) は、その後の研究により各種癌組織のみならず、正常組織中にも存在することが明らかとなり、現在では腫瘍関連抗原と考えられている。

今回我々は原発性肺癌患者の血中CEA値を経時的に測定し、その臨床的意義を検討したので報告する。

対象及び方法：過去約2年間に経験した原発性肺癌110例を対象とし、測定にはCEAリアキット(ダイナボット社)を用いた。

結果：1) 正常コントロール群14例は特に基礎疾患を有せず、CEA値は全て2.5 ng/ml以下であった。従ってCEA値は2.5 ng/ml以上を陽性とした。

2) 原発性肺癌110例の内、約60%がCEA陽性であった。組織型別では腺癌72%、類表皮癌57%、小細胞性未分化癌37%、大細胞性未分化癌50%がCEA陽性であった。

3) 臨床病期別CEA陽性率はI期20%、II期0%、III期61%、IV期82%であり、I・II期で5 ng/mlをこすものはほとんどなく、III・IV期のものほど高値を示す傾向がみられた。

4) CEA値の経時的变化をみると、病期の進展とともに血中CEA値の高い症例が多くなり、特に腺癌では陽性例のうち38%が10 ng/ml以上で、20 ng/mlをこすものもみられた。これらは遠隔転移のはっきりしたものがほとんどで、他の組織型でも10 ng/mlをこすものは広範な転移のある症例であった。また治療効果のあるものではCEA値が低下する傾向を示し、治療効果のないものではCEA値は漸増した。

5) 肺癌と喫煙とCEA値については、非喫煙群と喫煙群に有意の差はみられず、組織型及び病期によってCEA値は変動した。

まとめ：血中CEA測定は肺癌の早期診断に対する価値は低いが、CEA値が5 ng/ml以上のときは悪性腫瘍の可能性が極めて高く、10 ng/ml以上では遠隔転移を来している可能性が強く疑われ、肺癌の補助診断として有用と思われた。また組織型別では腺癌に陽性例が多く、病期の進行とともにCEA値はさらに高値を示した。他の組織型でも広範な遠隔転移を有するものは高いCEA値を示した。さらに経時的測定により肺癌の治療効果及び予后进行を推定する有力な1指標になるものと考えた。

38

肺癌患者における血清CEA測定の意義

京都桂病院 呼吸器センター

○松原義人、桑原正喜、二宮和子、ニッ矢義一、
畠中陸郎、宮本好博、宮本茂充、船津武志、
池田貞雄

目的：肺癌患者における血清CEAの意義については既に報告しているが、今回はさらに良性胸部疾患におけるCEA陽性例および肺癌におけるCEA陰性例についての検討を加えて報告する。

方法：CEAリアキット(サンドウィッチ法)を用い、肺癌265例、良性胸部疾患343例の血清CEAを測定した。2.5 ng/ml以上をCEA陽性とした。

成績：CEA陽性率は肺癌患者では61%、良性胸部疾患では15%であった。肺癌組織型別のCEA陽性率は腺癌112例で69%、扁平上皮癌83例で54%、大細胞癌19例で42%、小細胞癌19例で53%、組織型不明32例で66%であった。肺癌臨床病期別のCEA陽性率はI期45例で38%、II期40例で53%、III期129例で64%、IV期51例で80%であった。各組織型における病期別のCEA陽性率は腺癌のI期19例で53%、II期10例で60%、III期51例で67%、IV期32例で84%であった。扁平上皮癌のI期18例で22%、II期15例で47%、III期44例で66%、IV期6例で83%がCEA陽性であった。

良性胸部疾患でCEA陽性は53例、うち5 ng/ml以上は5例であった。年齢・性別のCEA陽性率は50才以下の男性99例で6%、女性46例で4%に対し、51才以上の男性123例で31%、女性62例で15%であった。喫煙本数別のCEA陽性率は非喫煙者124例で9%、1/2箱喫煙者62例で18%、1箱喫煙者93例で24%であった。PPD反応別のCEA陽性率は陰性76例で25%、偽陽性56例で16%、陽性190例で12%であった。PHA皮内反応別のCEA陽性率は平均直径5 mm以内33例で9%、6~10 mm 23例で13%、11 mm以上22例で23%であった。末梢血リンパ球数とCEA陽性率との間には相関はみられなかった。良性疾患のCEA陽性例で明らかに影響を及ぼすと考えられる他疾患の合併はなかった。気管支喘息3例、急性肺炎2例がCEA 5 ng/ml以上を示したが、全て経過とともにその値は低下した。

肺癌のCEA陰性例では、上記のような非特異的な因子の関与はみとめられなかった。経時的なCEA測定の結果、これらのなかでも一部陽性化するものがみられた。

肺癌患者におけるCEAの経時的測定は切除例でその推移が最も顕著であった。

結論：血清CEAによる肺癌の早期診断は期待しえないが、5 ng/ml以上の場合は悪性と言える。肺癌組織型、病期とCEA陽性率は関連性がある。CEAの経時的測定は容易に実施可能で臨床経過観察の上で有意義なものである。